

第1回 四国圏広域地方計画有識者懇談会 議事要旨

1. 日時：令和4年8月2日（火）10:00～12:05
2. 場所：高松サポート合同庁舎低層棟2階 アイホール
（上記会議室を拠点としたWEB会議併用方式）
3. 出席委員
那須座長、入江委員、加藤委員、香西委員、近藤委員、坂本委員、隅田委員、淡野委員、
豊田委員、中橋委員、芳我委員、原委員、町田委員、モートン委員、森脇委員

4. 議事

- 1) 新たな四国圏広域地方計画の策定について

<主な発言内容> 委員発言順

(1) 座長の選任

那須委員が座長に選任された。

(2) 座長代理の選任

森脇委員が座長代理に選任された。

(3) 議事

事務局より議事について説明を行ったのち、各委員から意見などの発言があった。各委員から出た意見は以下のとおり。

- ・ 四国は、若者の就職・進学等による人口流出が課題であるため、若者が四国を離れずに勉強や仕事ができることが大事である。その解決手段として、デジタルを最大限活用して場所にとらわれない生活や働き方が実現できる企業誘致などが必要である。
- ・ 移住支援や災害支援などでNPOが力を発揮している。今後、NPOの活動をサポートする中間支援組織の育成と、それらの組織が四国内で連携する取り組みが必要である。
- ・ NPOが数年後の将来計画を持てるよう、行政のサポートが必要である。

- ・ 3.11（東日本大震災）の教訓からも、生活をするためには暮らしの安定、安らぎ、商いが必要であり、産業の創出は非常に重要である。
- ・ 四国の弱みである災害のリスクを、官民共創で強みに変えていく努力が必要である。
- ・ カーボンニュートラルの観点では、四国の強みである豊富な森林資源を活かす努力が必要である。
- ・ 四国の行政は、区切りの意識が非常に強く、環四国を前提とした取り組みが少ない。
- ・ 四国の主要都市間における往来がもう少し良くなればと思う。
- ・ 現状のインフラや地域の交通手段などを徹底的に見直して、決断力と行動力をもった強い四国にしていくことが必要である。
- ・ 四国外から見ると四国は「点」であり、経済団体もまとまって活動していくことが必要である。
- ・ 全国の高速度交通体系が良くなっていく中で、四国が立ち遅れる危機感がある。四国内や他地域との接続性という観点から、高速度交通体系づくりや、交通機関同士の連携強化についてスピード感をもって取り組むことが必要である。
- ・ 四国内で、若者にあまり知られていない仕事や学びの場があるので、周知していくことが必要である。
- ・ 四国の自然を守り、その自然を生かす持続可能な取り組みや仕組みづくりが必要である。
- ・ 手にとってもらえ分かりやすい計画の実現のため、若者と何か一緒に継続して取り組む機会を設けることが必要である。
- ・ 地域生活圏については、国交省が独自に設定するか、総務省の定住自立圏構想等との整合性を考えるか、国が基本的な考えを示して地域関係者が自らデザインするか、どのように議論するか検討が必要である。
- ・ スーパー・メガリージョンを四国圏広域地方計画でどの程度重視すべきか、高速度交通網整備という点において四国新幹線を四国圏広域地方計画でどこまで議論すべきか、検討が必要である。
- ・ 産業再配置について、南海トラフ地震の予測では四国全域が震度6以上の被害を受ける想定であり、産業立地に向かないと見なされてしまう。四国として産

業再配置の代替ビジョンを示すことが必要である。

- ・ CO2の削減については、大規模火力発電所や原子力発電所などの未来を考えることが重要である。徳島県のLEDバレイ構想によるCO2削減効果、イノベーション効果、産業クラスター形成による地域振興への貢献など、四国における事例を全国に発信していくべき。
- ・ 地域毎にその地域をまとめることができるリーダーの育成が必要である。
- ・ 今あるものをどう活かすか、その個性に向き合ってホスピタリティのある動くリーダー、同じビジョンで決断力・スピード感を持って継続的に取り組んでいくリーダーの育成が必要である。
- ・ カーボンニュートラルという言葉が多く聞かれるようになった。産業創生の観点をもちつつ、ローカルな場所からグローバルな問題にチャレンジできるかもしれない。
- ・ 自然、景観を活かした観光と農林漁業、再生可能エネルギー、ICTを組み合わせることで、最先端の農林漁村をつくり、農林漁村の地域活性化のあり方を考えることができないか。
- ・ 四国は自然豊かで緑が多く、外国人やIターン者など人が来るポテンシャルがあるため、その魅力を最大限に発揮させることが必要。
- ・ 安全で安心して過ごしていけるような地域づくりは当然必要であり、災害に強いまちづくりは重要なキーワードである。
- ・ 防災の範疇には、減災や復旧復興、事前復興が含まれており、事前復興であれば、ソフト面の取り組みだけでなく、安全な場所へ移転するなどハード面の取り組みも含めて考えていくことが必要。
- ・ 豪雨災害への対応として流域治水という考えがあり、流域全体で治水に取り組む試みが必要である。
- ・ 四国は（地理的に）コンパクトにまとまっているので、四国全体の行政が同じ方向を向いて考えていくことが重要。
- ・ 四国は、少子高齢化の先進地であり、先進的な取組を行っていく上で様々な実践、試行錯誤ができる場である。そのノウハウを全国や世界に向けて発信してすることを考えるべき。
- ・ 四国はデジタル田園都市化を目指して、様式を変えないといけない。

- ・ DX（デジタルトランスフォーメーション）やGX（グリーントランスフォーメーション）をリードする人材が必要。
- ・ メタバースやデジタルツインを見据えたデータ活用や蓄積が必要。
- ・ 観光については（コロナ禍により）外国人の流入が困難な中で、外貨収入を上げるために投げ銭などの新しい仕組みが必要である。
- ・ カーボンニュートラルや産業・文化など様々な問題に横串をさして、今までにない組合せをつくる必要がある。
- ・ 四国はお遍路の文化があり、人をもてなそうという気持ちが非常に強く、それが他人と関わる力になれば、自助・共助のまちづくりが可能になる。
- ・ 四国の最大の魅力は、適度な人口密度、食が豊か、自給自足を目指せる地域、暮らしに必要な最低限のインフラやモノが揃っていることではないか。
- ・ 東京や大阪を真似る必要はなく、適度な人口密度の中で、人々が健康に暮らしていける四国をつくると、全国の人にとっても憧れの土地になるのではないか。
- ・ 若者が主役になって何かを考え、大人は若者の考えをかたちにする後方支援に回るのが良い。
- ・ 一人でいくつかの役割を担うダブルワーク・パラレルキャリアを進めることが人口減少下において地域活性化につながるのではないか。
- ・ 女性の方が、男性に比べて垣根のないコミュニケーションやメールでの交流が得意という研究結果もあるようなので、デジタルは比較的女性が得意な分野になるのではないかと注目している。
- ・ 地方在住、子育て、正社員などの理由で副業を諦めてきた方が、自己実現のために夢を持って地域社会に貢献できるような四国になれば良い。
- ・ 四国の地域活性化に四国新幹線の実現が不可欠でないかという地域の声もあるので、機運醸成に向けた活動をしていきたい。
- ・ 魅力的な仕事がないと外国出身者が四国に定着できない。
- ・ 「おもてなし」の精神によって、外国出身者が四国を満足できれば、彼らが母国に帰って四国を宣伝してくれる。
- ・ 日本人の若者（大学生、高校生、中学生）に対しても、四国の魅力、文化、歴史を分かりやすく伝えないと、四国外へ出て行ってしまう。

- ・ 四国の魅力を世界へ発信するために、外国出身の文化大使となりうる人物が必要である。
- ・ 四国は高齢化先進地域と考えることができ、四国の取り組みが全国や世界のスタンダードになる余地がある。
- ・ これからの社会は、物理的なモノと、それ以外のもの（デジタルやイメージ、農村観光等）を上手く切り分け、共存させながら物事を進めることが必要である。
- ・ 東京や大阪を経由せずとも、最初から世界に向けて情報発信をすればよい。物理的なモノより情報やイメージの方が発信しやすい。
- ・ 魅力的な職場づくりとして、スタートアップ誘致は四国においても必須である。オフィス進出や工場誘致などリアルを前提とせず、雇用の創出に重きを置いた政策が重要である。
- ・ 四国4県ばらばらということは、良い面でいえば多様性であり、差別化に繋がる。四国の強みとして自然の豊かさと言われるが、東北など各地方も同様に自然の豊かさを強みとしているため、その中で四国としてどのように差別化できるかを考えるべき。
- ・ 地方空港が海外とダイレクトに繋がれば、地方にインバウンド消費をもたらすのでしっかりと考えるべき。
- ・ 四国は、鉄道のような大量輸送手段より、MaaSなどニューモビリティを導入する方が、コストも少なく適しているのではないか。

以上